

せかいじゅの種

7



「何っ……!!?」
力が、抜けて……」

「みんなと……」
合流しないと……」



下下

アキ

アキ

...



は。

は。

「あつ……!?
直接……つ、
入って……」

ん

ん

ん

「ひ……あ!?申で……暴れっ!」



はっ……あ!?

まさか……飲み込まれる!?

ガイ

「……みんな、なっ……助け」

あ

あ……

ズ

ズ

ガイ



飲み込まれてから、どれ位経ったのだろう。
消化されるでもなく、今も犯され続けている

びく

あ、

あ、

変わったことは——、まるで妊娠したような
身体になってしまった事……

びく

アッ

プ…

いや、現実に妊娠したのだから。
その証拠に、今まさに身体の中から――

ニムニム

ク
ク

は……

は……

……

ク
ク

「……は、嫌……あっ!?!」

ク
ク





あ……!?! 何、これ……!!

やっ……、あ——

ムムム……

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

み、んな……、はやく、助けにきて……
このままじゃ、壊れちゃ、……あ

あ

びく

は

ん

は

あ

あ

びく

アピ

びく

ズニズニ……

END



「やめてマイク！話を聞いて！」

「ノー、リッキイは再調整の必要がある」

「調……整!?何を言って……あ!?!」

「弛緩剤の一種だが害はありません」



「っ……あ!?で……ちゃ……っ!」

「変わりませんね、リッキィ
これを使用するといつもこうでした」





「マ……イク……、それ、どうい……うっ」

「こうすれば思い出せますか？

よくこうして遊んだではありませんか」

あ

は

×₃

「そん……な……、ひど……あっ!!」

「記憶が復旧したようですね、リッキィ。

「それでは、グングニル発動の承認を」

「ダメ……っ! それ、は……っ!!」

「まだそんな事を。仕方ありません、
先ほどより強力なものになりますが、
壊れないで下さい」

「ひ……やっ!?あ、あ……っ!?!」

何……!?体がうずいて……堪らない!?

「どうです?承認してくだされば
これを挿入して差し上げましょう」

「……っ!!……そ、それは……」

「モンスターを利用した人工生殖器です。
さあ、リッキー……」

だ……め……っ！でも、身体、が……

あ

は

「どうです？入り口だけではなく、奥まで
挿入して欲しいのではありませんか？」

「……………す、る……っ！承認するから！！
マイクの、いれて……え!!!」

「ありがとう、リッキイ。
私達は最高の友達です」

「あっ……!! あ~~~~~ッ!!」

は、あ、あ

「素晴らしい。これが
リッキイの膣内なんですね」

む、ん

!!



あ
う
...

「もちろん射精機能もあります。
いきますよ、リッキィ」

「っ……うあ!?あ……あ!!」

「精液も人工的に
生成した物ですが……
受精するといいですね、リツキイ」



「あっ……は!!マイクラ……」

「経過は順調ですね、リッキィ」

あ
あ

あ

あ
あ

「これからは二人で、いや皆で、
グングニル計画を遂行して
いきましょう……」

END

フオレストセルに負けた私達は、
喰われるでもなく、
生かされてはいた

あー

は

あー

無事にはいえないが……

ズ
ズ

ズ

グ
グ
グ



「リ、リツキイ……」

さらに深く挿入され、
お腹が歪む



そして、当然私も同じ様に深く挿入される

リツキイは激しくピストンされ、身体を震わせていた



大量の精を吐き出される

わく

わく

あーあー

あー

この時は、この行為の意味を理解していなかったが、
膣内を満たす液体に快感すら覚えていた

わく

わく

あー

あー

あー



「あ……はっ」

休むまもなく、次の触手が挿入される

はっ

ぴん

はっ

ぞく

はっ

今はただ、他の冒険者が

ここへ辿り着くのを願うばかりだ

ぞく

ど

びび

びび



しばらくして、私達の身体は大きく変化した

あ……

びく

は

びく

ズ
ズ
ズ

グ
グ
グ

びく

あう

あ

セルの精子を受精したただなんて信じたくはないが
お互いの姿が現実を突きつける



まずはリツキイだった

ひ……あ

あ

ぞろ

あ

ニル

ぞく

ニル

触手の幼生？が大量に体外へと吐き出される
次はきつと、私の番だろう



「あ……がつ!？」

私が孕んだのは大きな卵? だった

あ……あ……

ゴク

あ……あ……

あ……あ……

ガク

あ……あ……

きつと、この為に今まで

生かされていたのだろう

ヒ

ヒ

ヒ

ヒ

ヒ



利用価値があるうちは喰われる事もないのかもしれない

ぞく

あーっ♡

あ

あは

ぞく

あ♡

ぞく

ぞく

エロ...

おは

もつとも、私達の精神がいつまでもつか...
ひよつとしたら、もう、壊れているのかもしれないが

END

「く……うっ!!この、……っ!!!」

ズズズ

あ
っ
っ
っ

ん

ん

「……ちよっ!?どこさわって……っ!!!」

あ

は

うん。

ニイ

アッ

ニイ
ん



「あ……はっ!?おし、り……、
ぱっかり……、やめっ……!?!」



あ
あ

あ
あ
あ

あ
あ

あ
あ

あ
あ

あ
あ

あ
あ

あ
あ

あ
あ

「……ひっ……あ!?!」





「な……につ……!?
何か……、出して……!？」



おっ...

びしょ

「.....ひあつ.....!!」

びしょ

びしょ

いや……あ！とまら、ないっ！！



んんん

んんん！！

んんん

ん

んんん

ちゅちゅ

ちゅちゅ

ちゅ

「ちょっと……!?やめ、なさいよ!!!」

「まあまあ。酒場で酔いつぶれたお前を
ここまで運んできてやったんだぜ？」

「ちょっと位役得があってもいいよなー」



「……そっ、んな……、やめ……っ!?!」

「さて、貴族のお嬢様はどんな具合かな」



「おっ！ 処女じゃんラッキー」



「や……っ、め……、はあ……っ!!」



「っ……！は、いい穴だわー」

「早く代われよな」

「……なっ、か……!?……だ、めえっ!!」



「あ、お前最初は中に出すなよ」

「悪い悪い」

「あ……あ!?……こ、んな……」

「じゃあ次。一度中に出されちゃったんだし
もう関係ないよな」

「……やめっ……、あ……っ!!!」



「も……、……許し、て……」

「ギルド全員で回したからなー。

いっそうちにこねえ？」

「そりゃいいや。ここで肉便器やってろよ」

「……何を、ふざけない、で……っ!!」

「そういやお前のとこの館に
いい感じのメイドいたよなー」

「……っ!? ローザは、
関係ないでしょ……っ!!」

「へっ……、それはどうかな～？」



「あ……のっ、これで本当に……？」

「ネクターⅡにアムリタⅡだっけ。
まかせといてよ、その代わり……」



「キーパーさんもギルドの為に大変だねえ」



んんん

あ
…
ん

は
…
ん

「……はっ、う……!!!」

んんん

ん
ろ

「これだけほぐせば十分かな」

あ

あは

「あ……あつ、ん……っ」





「それじゃ、いれちゃうよ～」

「……はっ、い……っ」

はっ、

はっ、
♡

はっ

はっ



「よっと、もう少し……!!」

「ひ……っ、ぐ……っ!?!」



「き、た!!出るッ!!」

「.....あ、つ.....う!?!」

あ
あ

ト
ト

ト
ト

ク
ク

ン
ン

ン
ン

ン
ン

ン
ン

ン
ン

「まだまだ萎えないし、
こっちの処女も貰っておこうかな!!」

ぴゅん
とっ

んく

んく

んく

おー

んく

んく

「え……、そんな……!?
お、お待ちください——」



「お、こっちも 絞まる!!」



「ふ、う ご苦労さん。」

「約束のアイテムは後で届けておくよ」

「はい……、有難うございました」

「そーいやお宅のお嬢様も
うちのギルドに来てみるみたいだぜ」

「えっ!?!……、それは一体……?」

「ローザ……、どうして……!？」

「申し訳ありません、お嬢様……」

「細かいことはおいとけよ。俺達はまだまだやり足りないんだ」

「貴族の娘が傷物なんて知られたら、お前らも困るだろ……？」



「ほら、先にイかせた方に突っ込んでやるからがんばれよ！」

(これ以上、お嬢様を傷つけるわけには……)

「んっ……！じゅるッ」

「ローザ……!?!」



「ローザさんはココが弱いんだよね～」

「あ……ッ！だ、めえ!?!」

「お前らが先にイったら二人ともおしおきだからな！」

「そ、んな……、あッ!?!」

「ラクーナさんは後ろの方がいいんだっけ？ほらほら」

「んんんんっ!?!」



「ごめんなさい、私、もうっ!!」 「ローザ……っ、あ——っ!!」

「はい残念～。二人ともおしおきな！」

「……はっ、あ……っ」

「じゃ、こっちも……、顔で受け止める！」

「……っ!!あ、っ……っ」



「じゃ、俺はこっちで！」

「ま……って、少し……、休ませ……!!!」

「だめだめ。おしおきなんだから」

「ひ……あ、ん……っ!!!」

「俺への奉仕も忘れんなよ」



「あぁっ！はげ、しいですっ！！もっと、ゆっくり……っ！！」

「そうしたいんだけどね、腰がとまらね！」

「ん……っ！！……んぶっ！！」

「ラクーナちゃんのケツ穴もいい感じだぜ！」



「で、るッ!!!」

「あ~~~~~ッ!!!」



「……は、あつ……。もう、いいでしょ……」

「まだまだ、ヤリ足りない奴はいるぜ」

「二人ともちゃんと孕むまで帰す気なんてねーよ」

「そ、んな……。あつ!!!」



END

「み、皆様おやめ下さるー!」

「俺達のお世話してくれるんだろー?」
「は、このような事では……」



「ほらうちのギルド男所帯じゃん？ たまうちやうてなー」

あ……

あ

キヤ

ひく

しゃー

しゃ

「ローザさんも館に一人つきりじゃ寂しいんじゃないの」

「そんな……あつ……」

「こんなに濡れてるじゃん？我慢しないでさ」

「.....」

「黙ってると続き、しちゃうよー」



ぐわ

ぐわ

ん

ぐわ

ぐわ

ぬちゃ

ぬちゃ

ズルン

「それじゃ、一番槍いきまっす！」

「……あ、……えっ!?!」

ガッ

あ、!?

あ、!

「いきなりそつちかよ」

「前はリーダーに譲ったんじゃないですか」



「んじや、お言葉に甘えて……！」

「ひ……あつ、痛……っ!?!」

「ほら、やっぱローザさん処女だったじゃん!」
「譲るんじやなかったな~」



「ぶら……すつきりした」

「こ、これで、もうよろしいですか……」

「えー。俺まだローザさんの穴使ってないしー」

「そういうことだ。全員分頼むわ」



「あ、はっ……、すっ……っあ！」

「これだけやれば俺の子妊娠してるかなー」

「いやいや俺だよ」

「誰の子でも恨みっこ無しだぜ？」

「違ったら次は俺が孕ませるし！」



「だいぶ大きくなつたなー」

「もうそろそろ産まれてくるんじゃないっすか」

「それじゃ、新しい仲間の為に今日も稼ぎに迷宮に行くか！」

「「おー！」」

END



さあ、一族の巫女としての役目を果たしなさい

頭の中に「神」の音が響く

「わかった……、これで、いいか」

する……



何本もの触手がのび、体をまさぐる

「……ん、……ふっ」

思わず声が漏れてしまう



徐々に動きが大きくなり、
奥へ奥へと触手が肉を掻き分ける
「あ……う、は……っ」
これだけ濡らせば十分か
また声が響く





触手が根元から動き、膣肉を広げられ、
異物感と痛みが押し寄せる

「……う、ぐ……っ!?!」



内部に侵入した細い触手が
縦横無尽に暴れる

「ひ……、あ……っ!!痛っ……!?!」



触手が動きを止め、大量の精を吐き出す

「……ん、……あ……あっ!!」

これで儀式は終了のはずだった



はっ

はっ

はっ

「はっ……、あ……」

……届いて、おらぬ

また頭に声が響く。どうやらまだ続くようだ……



ようやく儀式は終わった
これで新たなモリビトが生まれるのだらう
そして、これからも生き続けるのだらう

END

「行方不明のお父さんはお兄さん達が見つけてあげるから、
君もちよーつと我慢してね」

「ひゃっ……!!」

ア

ア

ア

あ

ア

「おじさん……!?何、を……っ」

「お・に・い・さ・ん達もほら、命がけだからね」

「ちよつと触るだけだからさ」

ぴくん

あ

ひ

フ
回

ス
ス

ス
ス

「あつ……!?そこ、触っちゃ……、だめっ……」

「お父さん助けたいんでしょ?我慢して!」

おい、例の薬は」

びく

んん

ズン

ジュル

「おう。この媚薬を、こらうー」

あ

「っ……え!? あ、う……っ!」

「おっ、効いてる効いてる」

びくっ

あ

あ

「よく奥まで塗りこんで、馴染ませておこうねー」

びくっ

びく

ズ
ッ
ッ



「だめ……っ!? 見ない、で……え!」

「ん、漏らしちゃったか」

ブル

あー

あ

ブルッ

「リラックス出来てるね。もう二本啜ってるよ」

びん

しゃ

あ

あ

あ

く

く



「あ……はっ……!!お尻の奥、熱……い……」

「よしよし、奥まで突っ込んであげるからね。それじゃ……」

あう……

ん

んあ

ああ

ん

ん

ん

ん

ん



「ひ…………ぐ…………つ!? あ…………あ…………あ…………」

「おつ、すげ、はいつた…………!」

「ッ」

「ぞくぞく」

「ガクガク」

「ぞくぞく」

「おちおち」

「それじゃ、コツチも使えるように準備しようね」

「ん」



「……あ……っ、は……あっ……!!」

「はやくしろよ、動けないだろ」

あ

ニコ

びく

めい

「急かすなって。大事な所だからじつくりと、ね」

びく

ちゅ

ちゅ

ちゅ

ちゅ

ちゅ

びく



「いつまで二人で楽しんでるんスカ。俺らも混ぜてくださいよ」
「今は二本でいつぱいいつぱいなんだから、自分でシユれよ」

「ひつでえ。んじや服脱いじやおうね」

あ

ほ

ぐ

ぐ

ぐ

ズ

ズ



「っふう……、すつきりした」

「それじゃお父さん探しに行くか!」

あ

ぴ

「ちよ、俺らにもやらせておくれよ!!!」

あ……

ん

ん

ぽぽ

ぽ

END

第6層で力尽きたパーティ。触手に生け捕りにされ……





ピュッ
ジュッ

ジュッ

ジュッ

ジュッ

ジュッ

ジュッ

ジュッ

ジュッ

ジュッ

ジュッ...

ジュッ

ジュッ

出産しながら、新たな触手を挿入される事すら快感を覚えてしまう彼女達……



後何回繰り返せば、終わるのだろうか——

END

安全と思われたキャンプ地は、
植物型生物の巣であった



「や、め……あっ!?」



「な、え……っ!?」

一際太い触手に尻穴を貫かれる

お・う

びく

びく

い

え

ひく

びく

びく

「い、ぐ……っ!?!」

一方、こちらは生殖器を貫いた

肉の裂ける痛みが全身に走る

ズ

ズ

ズ

ズ

ズ

ズ

ズ



「うあ！ 抜い、て……っ！！」

激しく抽送を繰り返される

あっ！！

あ、

あっ

あ

ひあ！！

「あ、ふ……、はっ！！」

分泌される液体のおかげか、
徐々に痛みは和らいだ



「あ……っ!？」

大量の液体を直腸に注がれ

身を震わせる

あぁあッ

「ひ、あぁあッ!!」

おさまりきらなかった分が

膣から溢れ出した



「……うあつ!? 抜いちや……ッ」

触手でかろうじて抑えられていた
液体が噴出する

あー

は

は

は

「あ……っ!!」

触手が抜かれたことで安堵する
が、彼女達が解放される訳でもなく――



何度も液体を注がれ続けた結果……

「あ……は……っ」

はー！

あ、

あ

「んあ……っ」

彼女達の身体は妊婦のそれのように大きく膨らんでいた



そして、とうとう出産の時が来た

液体を注がれ続けた所が

そのまま苗床となっていたようだ



内側から触手に蹂躪される感覚に、戸惑いながらも快感を覚える二人

彼女達を襲った触手の

幼生が顔を出す

だが、なかなか全身は出さなかった

あ

あ

は

は

あ

びく

びく

びく

びく

びく

びく

びく

びく

まるで生まれながらにして彼女達を
弄んでいる様だった

そしてそれは、これからの関係を

あらわしているのだから……

END





「ちよ……、ちよつと冒険者さん！しっかりして！」



「あ……っ!? や、め……っ」

「あ……っ!? や、め……っ」

「あ……っ!? や、め……っ」

「あ……っ!? や、め……っ」

「あ……っ!? や、め……っ」

「あ……っ!? や、め……っ」

「あ……っ!? や、め……っ」

「あ……っ!? や、め……っ」



ほら

ちや

あ
ず
き

ちや

グイ

ア
ア

ちや

ちや

「……ひっ!?ダ、メ……っ、ダメっ!!!」

「おし……り、にも!?やめ……っ、こらっ!!!」



しゅん
しゅん

あ
あ

は
は

あ
あ

ズ
ズ
ズ

ズ
ズ

ズ
ズ

しゅん
しゅん

「あ……っ!?あ——っ!!」



「やめ……っ!! 抜い、て……っ、 あ!?!」

びん

あ

あ
っ
…
あ

びん

びん

びん



「……何っ……、これ……!?!」



ち…

ち…

ん

んん

ん…

んんん

ん

ん

ん

「ン……ッ!?ン〜〜〜ッ!!!」

お腹の中で蠢いていた何かが急に暴れだす

そして、ボクの中から飛び出した……



それは、とても長く、何度も膣壁を擦り上げ
ボクは何度も絶頂を迎えた……

そして、次の生殖器がもう顔を出してる
……やっぱり、迷宮はこわい所だったな……

END

大陰唇を広げ、細い触手が這い回る
「……んっ、あ……っ!!!」
思わず声が漏れてしまった



十分ほぐれたと悟ったのだろうか
細い触手より太くてごつごつしたモノが
寄ってきているのが見えた
「いや……、あ……っ!!」





「うあ……っ!?あ～～～っ!!!
大きな触手が深く突き刺さった
そして、激しくピストンされる
「い、た……あ!!やめ……っ!!!」

あ
あ
あ

あ
あ
あ

あ
あ
あ

あ
あ
あ

あ
あ
あ

あ
あ
あ

あ
あ
あ

あ
あ
あ

あ
あ
あ



「……はっ、う……」

大量の樹液?を膣内に出されたが、
ひとまず触手が抜かれたことに安堵した
……その後、また別の個体に
犯されることになったけど……



あ

は

は

あ

たすけ

たすけ

あ


ズ

ひく

ズ

ズ

ひく

A character with a large, red, stone-like body is being held by several blue tentacles. The character has a distressed expression, with sweat and tears on their face. The tentacles are holding the character's arms and chest. The character's body is covered in small, white, spider-like creatures. The background is dark with some blue tentacles and eyes.

それから犯され続ける毎日だった
隙を見て脱出を図ったのだけど、
身重の体ではうまく動けなかった……
怒った彼らは、手足のみを石化した……
こんなこともできるんだな、なんて
まるで他人事のように考える自分は
もうダメなのかもしれない

あーん

あーん

あーん

あーん

あーん

あーん

あーん

あーん

あーん

あーん

あーん

しばらくは、すっかり開発されてしまった
お尻の穴を弄られる快感に酔っていたが、
お腹の中から何かが外へ出ようと手を出した
心のどこかで、このお腹の膨らみは
何かの間違いだと信じていたのか
少なからずショックではあった



「あ、あー……っ、あ……っ」
産まれてくるモンスターの幼生に
久しぶりに膣を刺激され、何度も絶頂する
……もし無事に生きて帰れたとしても、
これでは普通の生活が送れるのかと
不安を覚えたが、それすらも
快感に押し流された



「何、こいつらっ……!?服が……溶けて!?」

「絡み付いて、離れない……!!」



「や……ちよ、何 を……っ!?!」



「あ……、ひろげ、るな……あ……!?!」

「……や、そこ、ダメえっ!!」



ズク

ズク

は
う

あ
う

あ
う

あ
う

ズ
ク

ズ
ク

ズ
ク

ズ
ク

ズ
ク

ズ
ク

ズ
ク

ズ
ク

ズ
ク

ズ
ク

ズ
ク

「あ、あああッ!!い、た……ッ!?!」

「やめ……、あッ!?!」



「な、かで、膨らんで……ッ!?!」

「何か、出て……っ!?!あ、っ……う!!!」



「……ひ、あ……っ!!!」

「は……う、もう 放して……っ」



ぐく

びく
びく

あ
ひ

あ
ひ

あ
ひ

ん

ん

あ
ひ
ん

ん

あ
ひ

あ
ひ
ん

あ
ひ
ん

あ
ひ
ん

彼らが私達のお腹の中で何をしていたかは分からない
今まで経験したことのない大きな物体が
膣を通過して出て行く痛みと快感に



ただ、身を委ねるしかなかった

ごめんなさい、
今樹海の水は切らして…

え、直接飲む!?

それは、違…っ!

ちやるる

は

は…

ん



は…あつ…

こんな事で、**本当に…？**

は

は

ん

ん

ん

ん



元気になつたつて……？

そ、そんなの見せなくても……

え、あ……

お礼なんていいから、あつ……



あ…はっ!?

お、く…まで…!!

ん

あ、う

あ、う

あ、う

あ、う

あ、う

あ、う



も、う…こんなに…吐して…

は

は

あ

ズル

十分、回復したみたい

それじゃ 気をつけて…ね





たす

や
...
あ

たす
たす
たす

たす

たす



〜

〜

フ...

フ...

フ...

フ...

フ...

フ...

は...

〜

フ...

フ...

フ...



た・の・あ・は・!!

あ・は・あ・は

あ・は・あ・は

あ・は・あ・は

あ・は

あ・は・あ・は

あ・は

あ・は

あ・は





















































































































































































































































































































